平成２５年３月３０日(土)

第４３８回　史跡めぐり

越谷の知らなかった道を歩く

越谷の北・林西寺から古利根の渡し場、そして安国寺へ

白龍山月照院　林西寺
(山門)

大瀧山東光院　安国寺

NPO 法人　越谷市郷土研究会

第４３８回　史跡巡

コースガイド

越谷の知らなかった道を歩く

越谷の北・林西寺から古利根の渡し場、そして安国寺へ

日時＝平成二十五年三月三十日(土)

集合＝東武線　武里駅東口広場　　午前八時三十分

参加費＝五百円　（拝観料・資料代・保険等）

案内者＝常任理事・渡辺和照　　実行委員・坂本誠一郎

武里駅　　８：３０集合

①西光寺

②大枝香取神社

③歓喜院

④会野堀橋（旧称が　まん橋）

⑤古奥州街道・南地蔵尊・石橋供養塔

⑥女帝神社

⑦林西寺

⑧平方（彦太）の渡し場跡

⑨平方浅間神社

⑩平方公園（休憩・手洗い）

⑪大泊観音堂（慈眼堂）

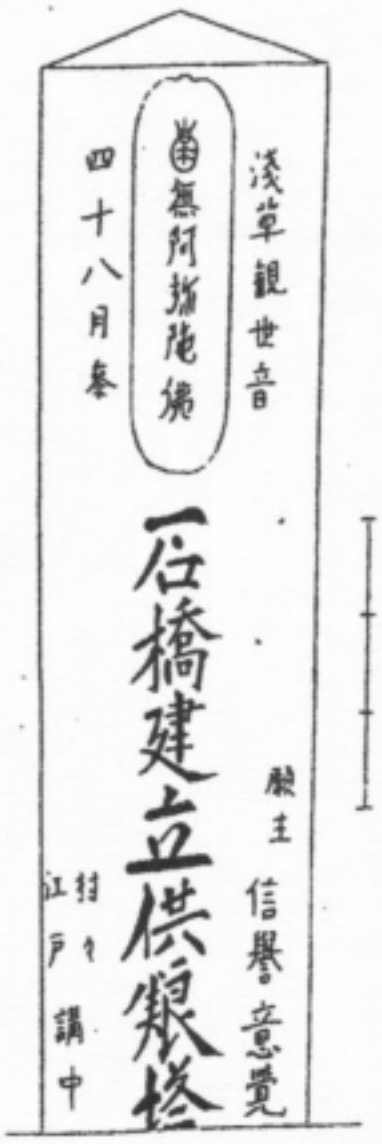
　金塚・名倉堂・一本松

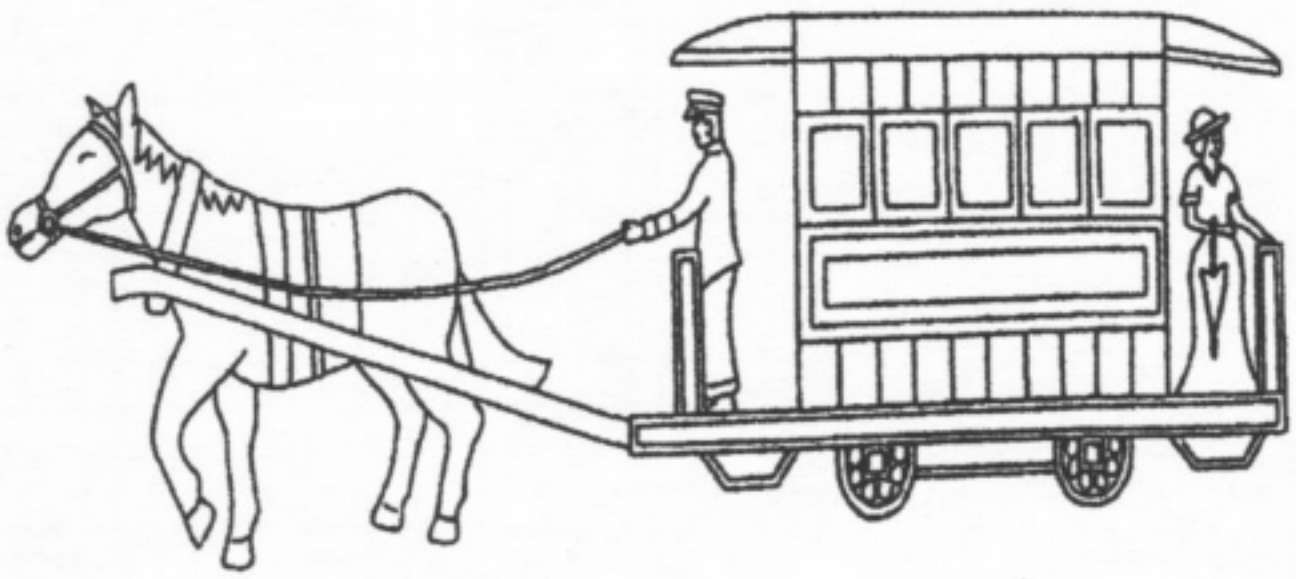
⑫大泊香取神社・・・路上参拝

⑬安国寺

⑭念仏橋・・・先述古奥州街道

　せんげん台駅　１２：３０帰着予定

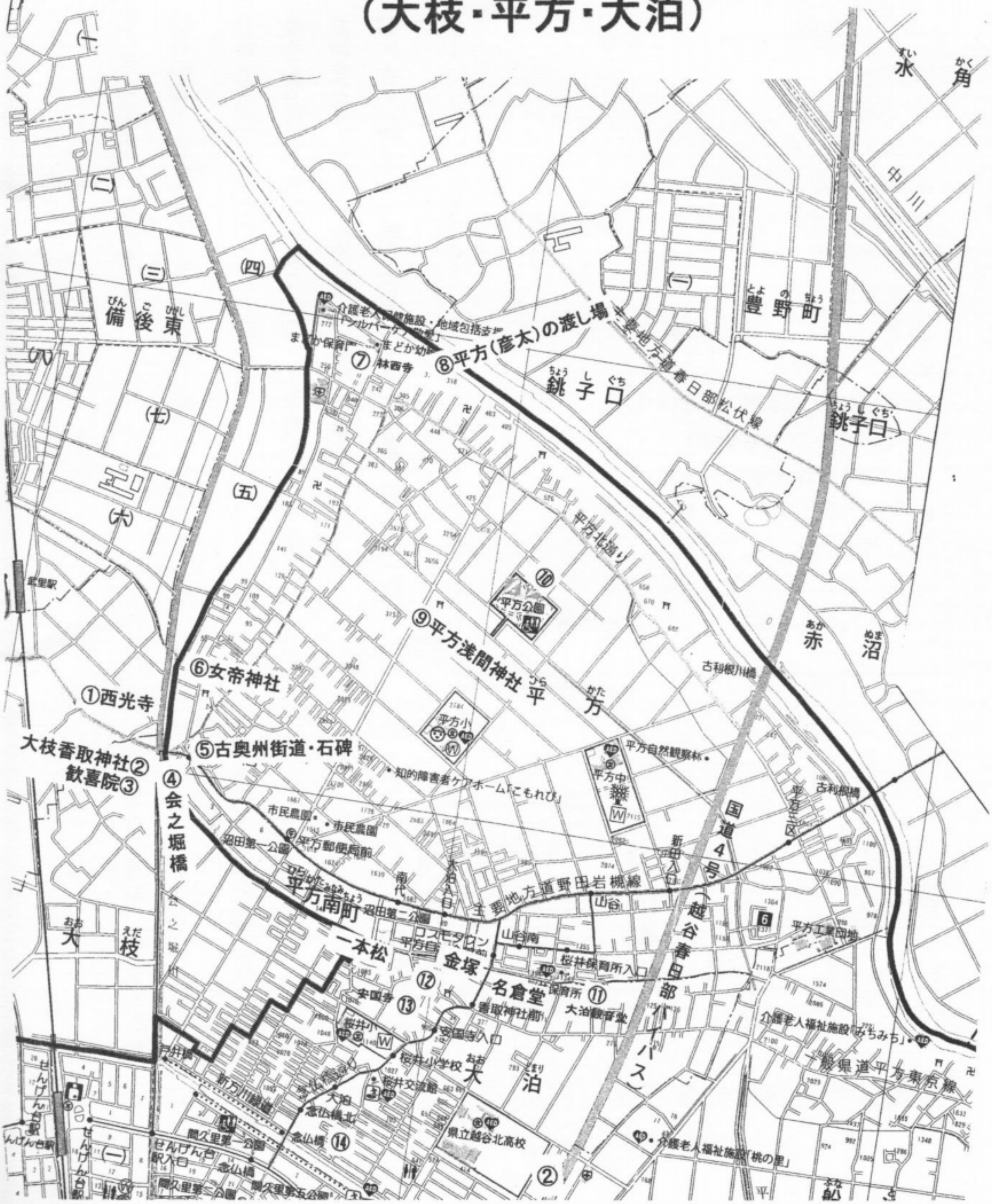




古利根川に架かる公園橋の北詰の壁画「テト馬車」（雨宮一正作）

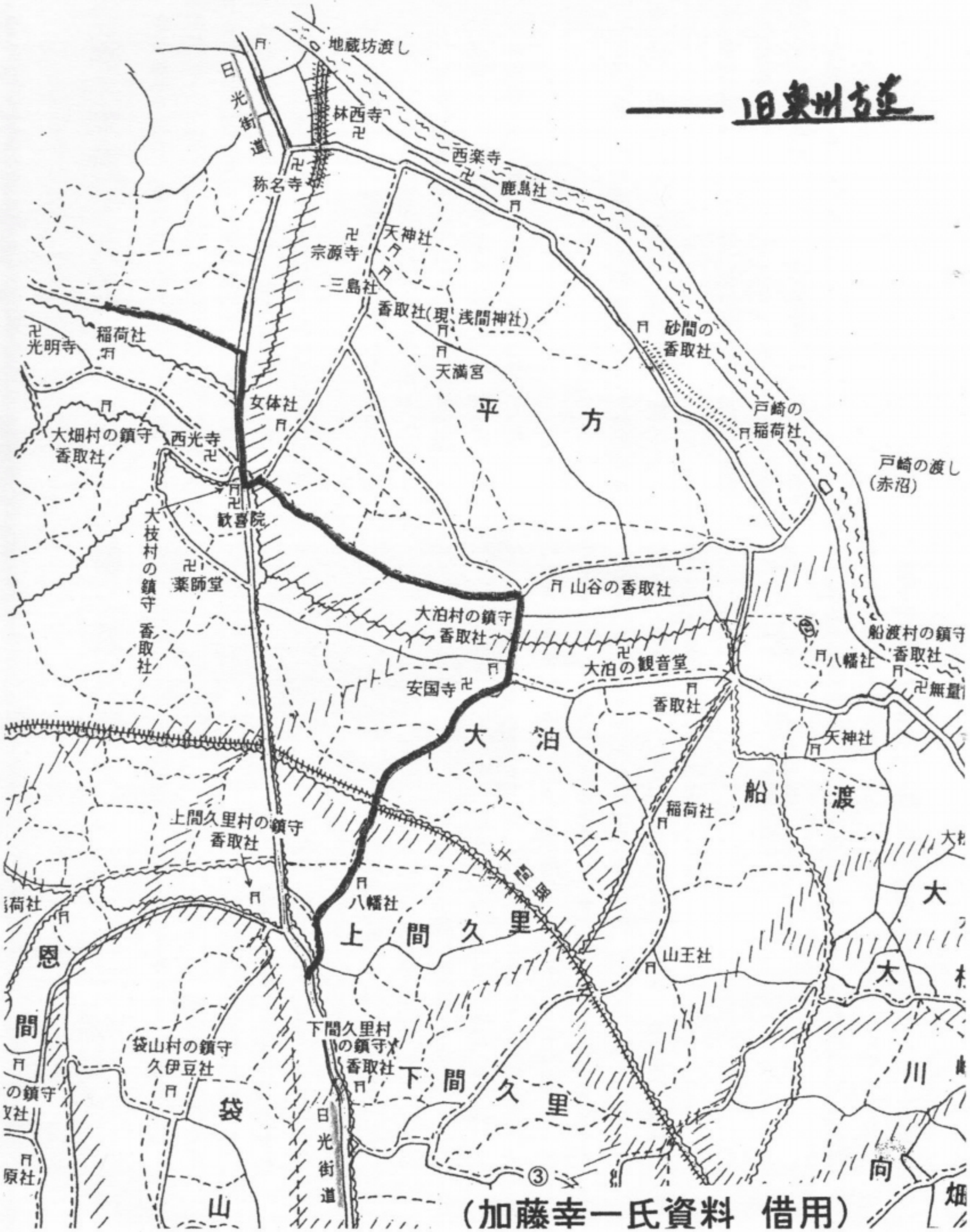
史跡めぐりコース

（大枝・平方・大泊）



江戸時代の古道（推定）

江戸時代の主な寺院と神社



（加藤幸一氏資料　借用）

● 新方領・平方・大泊

新方領(庄)　春日部から西方に曲流した古隅田川（古い頃の利根川主流）を北の境に、その下方を古利根川と元荒川に挟まれた地域。元下総国、約５００年前太田道灌が岩槻支配の頃、武蔵国に編入され、新しい方、つまり新方の地名が付けられた説があります。（新しい干潟・新しい陸地・つまり新潟から名付けられたとみられます）

平方の地は、東は古利根川、西は林西寺を頂点として会野川と呼ばれた古い河道が南下し、その南端から底辺状に東に向かい再び古利根川へと通ずる三角形の地域。そして平方の名は、比較的高い平らな土地から。微高地・・・明治期から大正期にかけ、畑地の土がレンガ原料として多量掘り出され、水田地帯に変わりました。

大泊の地は、もとの利根川の一流路の会野川に面し、自然堤防が発達した所。泊とは、川や海にそって設けられた港の意味です。

大泊の地名は、安国寺の寺伝によれば、紀伊国熊野大泊村の安国寺住職であった誠誉専故という僧が凡そ６００年前にこの地を通りかかり、安国寺を再建し住職となり、この地を故郷大泊の地名をこの地の地名にした言い伝えであります。

● 西光院

文禄年間（１５９２～１５９６）に、岌秀上人によって創建された浄土宗の寺院。江戸時代には寺子屋が開かれ、その門弟達が勧請した天満宮の石祠が境内に祀られています。また宝暦年間（１７５１～１７６４）には、江戸下谷の幡随院の了硯大僧正を招いて、盛大な念仏会が催されています。下見の際、ご住職にお聞きしましたところ明治の初期に火災に遭遇、何も残っていないとのことでした。大畑地区に伝わる念仏踊りの一種で「やったり踊り」のスタート地点です。　また昭和５２年８月建立の福田総理大臣書の戦没者慰霊碑があります。これは昭和１２年７月大東亜戦争勃発以降、大畑地区から７０余名出征し、戦没者１４名に及ぶと記載されています。第二次大戦終戦後の３３年を記念したものです。

● 大枝香取神社

大枝の地名由来は、１㎞余り東方を流下する古利根川が、当地付近まで乱流し、大きな川を示す「大江」が転訛したものと伝わる。「風土記」には、隣接する歓喜院の寺鎮守として祀られ、村の鎮守

にもなる。１８１４年（文化11年）の棟札にも本殿の再建に歓喜院が係わった事が窺える。明治初年には神仏分離政策によって歓喜院から境内を分け独立しました。

当社は下総国一之宮「香取神社」の末社で、祭神は「経津主神ふつぬしのみこと」で、昔から日光街道沿いに鎮座し、古くから「五穀豊穣の神」として拝められました。創建の年代は詳らかではありません。

● 歓喜院　明治の几号（水準点記号）

「武里観音」（真言宗　豊山派）として知られています。寺院の由緒書など不詳。

本日は、添付資料「旧大枝村歓喜院の明治の水準点（高低測量几号）」を、拝見します。

● 会之掘橋（旧称がまん橋）

冒頭地名説明の所でふれた会野川に架かる橋。

下流で大泊観音堂裏にて「せどっぽり」として再度出合います。

本川の最下流では再度古利根川と合流。二度と会うからの命名。

●元は土橋であった。この土橋地点はこの地域交通の要所で、江戸時代には高札場があり、当然さらし首が置かれたとこであります。

●石橋供養塔　この地に当初架かっていた橋（土橋か？）が脆い為、荷馬車が諸とも川に落ち、馬が死んだ。この為、馬を連れて来た江戸浅草の人が土橋を頑丈な石橋に直した（宝暦12年　１７６２年）。その記念碑あり。江戸の人達との交流が伺えます。

●千住馬車鉄道について

明治26年から30年まで日光街道に千住馬車鉄道が千住と粕壁の間を走っていた。停車場が、武里村（大枝）におかれたが、その場所は周辺の地域の交通の要所である土橋のある辺りであったと思います。

馬車鉄道とは、道路上に地面に埋め込まれていた線路の上を一頭立ての馬車が千住茶釜橋（現在の荒川放水路千住新橋東側付近の川の中）から粕壁町の最勝院前まで走っていた。台車は定員12名。御者と車掌がいた。明治29年当時の途中停車場は竹の塚・草加・三軒屋（蒲生）・大沢（越ケ谷）・大枝（武里村）。開業当時の運賃は、千住～越ケ谷間は15銭・越ケ谷～武里間は6銭・武里～粕壁間は6銭でした。

● 古奥州街道と平方南組地蔵尊

●古奥州街道

今回の史跡めぐりでの関係範囲は、上間久里（日光街道を離れる）―念仏橋―安国寺―大泊香取神社―金塚―大泊入り口（会野川沿いの土手道）―枚方郵便局―南の地蔵尊―会野堀橋（旧称がんまん橋）―再び日光街道と合流―備後南から再度日光街道から離れます。（地図参照）

●三つの石仏　※

①宝暦12年（1762年）の石橋建立供養塔

②延宝元年（1673年）地蔵像供養塔

③正徳5年（1719年）傘付青面金剛庚申塔

●女帝神社

この女帝神社は、太古の昔より平方南集落の氏神として祀られてきた神社で祭神は伊弉冉尊（いざなみのみこと）と神功皇后（じんぐうこうごう）＝＝第14代仲哀天皇の皇后・第15代応神天皇の母＝の二女神。　当社は明治45年神社合併を促す政府の趣旨にもとづき、後刻訪問する平方浅間神社に合祀され、同時に当所の神殿も取り壊され、浅間神社に御幣と石の祭神を遷した。がこの合祀後大正・昭和初期には、当地では、夭折する家庭の婦人多く、経済的にも悲運に襲われる家がおおくなった。これは、神社の合祀が神慮にかなわないためであると考えられ、昭和8年仮宮を建てて神をもとの地にお戻りさせた。するとそれからは不思議に不幸が起きなくなった。こうして昭和42年の年末（明治100年を期して）に、現在の神殿を新築したが、これは南集落の氏神として人々は強い信仰のもとにお祭りを続けているという旨が記されており「産土の女神の慈悲に守られて　幾代久しく栄光あれかし」などの歌が添えられてる。神社崇敬の念が厚い集落の人々の、昔ながらの素朴な信仰がこめられている神社の一つといえよう。例年一月十二日が祭日（オビシャ（御備社）が行われて来ています。合祀されて社殿の無かった時代でもこの行事は休まず続けられてきています。

当地のオビシャは、豊作祈願として行われ、埼玉県教育委員会の「埼玉の祭りと行事」に越谷の中で唯一記述されております。

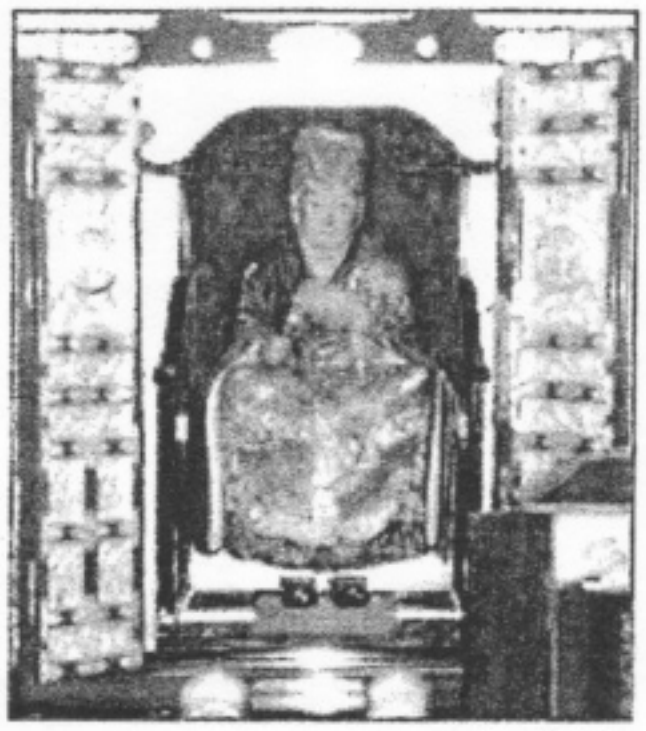
そのオビシャには「娘御膳」を作り、祭典のあと直会となり、その後は祝宴となる。夕刻になると、年番の引継ぎ式である「とうわたし（当渡し）」が行われる。これは、前年番・本年番・後年番の三家族・ご夫婦立会いで行われ、順次連綿と引き継がれて行くものです。

境内には、天満宮文字塔・文字庚申塔・青面金剛像庚申塔・普門品供養塔・僧侶の墓塔・六十六部廻国塔などがならべられています。

●林西寺

白龍山月照院と号し、覚蓮社成和上人による嘉暦年間（1326～29）の開山と伝わる。当初は大善寺と称したが、然誉呑龍上人が天正12年（1584）第9世を継いだ時、林西寺と改めたと伝えられています。

●呑龍上人（子育て呑龍）（1556～1623）68歳


▲呑龍上人

○生誕　1556年武蔵国新方領　一の割村にて岩槻城主太田三楽斎元資正の家臣井上将監信貞の次男として誕生。（一の割「円福寺付近」）

○出家　1569年14歳にて林西寺第8世岌弁上人に引取られ、幼名龍寿丸を曇龍と改める。

○修行　翌年、江戸増上寺学寮にて増上寺11世雲誉上人の下で厳しい修行。

○昇進　1588年増上寺管長は、源誉存応上人（後の普光観智国師＝＝※安国寺に市文化財の書状あり）が、迎えられ、この時、学寮の教授を勤めていた曇龍を推挙し、曇龍は、「上人の号」を授けられた。

○林西寺へ　右記僧位の機に、林西寺第9世に迎えられる。（29歳）

○家康安堵　寺には高25石の寺領が、また曇龍には別途、特に高25石の学問料が与えられた。（林西寺の「中興の祖」へ）

○兼帯　この間に二寺の開山・二寺の住職をも兼帯した。

○林西寺離れ　1600年平方を離れ、武蔵国大善寺第三世住職へ。またこの頃増上寺源誉上人の片腕として、中央でも大活躍。また1608年には源誉上人の名代として駿府城に家康を訪問。

○太田大光院開山　家康は、予てから先祖縁の地、上野国新田郡に先祖追善供養の為、寺院創建を念願していたが、1611年太田の金山に大光院新田寺を開山。家康は観智国師の推挙でこの開山僧へ曇龍を起用。

この時家康より、御朱印伝馬50疋30人与えられる。（時に呑龍58歳）　次いで翌年には大光寺に高300石の寺領が寄進）

○呑龍へ改名　夢のお告げで「曇龍から呑龍」へ改名した。

○子育て呑龍　当時は戦国乱世の影響で人心は極度に荒廃し、又連年に及ぶ凶作飢饉が続いた為、親族殺害・堕胎・間引き・嬰児殺しが一般的となっていた。

呑龍は人を殺さず、ものの生命を奪わないなど五戒を説き、併せて貧しさのため子供を養育出来ない家々から多くの幼児を預かり、大光院の寮に引き取って育て、家の手助けができるようになる七、八歳になると家に帰した。こうして育てられて幼児は心身いずれも健康に育ったという。かくして「子育呑龍」として後世まで広く知られた。

○家康の死　その後も家康の側近観智国師に従って、御前法問に勤め、家康の信任はますます厚かったが1616年家康が駿府で没す。

○小諸蟄居　当時は家康・秀忠は鷹狩を好み、鶴などを捕えていた。狩猟は江戸近郊にあって、将軍家の特権であり、一般の人には狩猟は厳禁であり、殊に鶴を殺すことはご法度で死罪は免れなかった。ところが、武州大宮在の郷士の流れをくむ源次兵衛という農民がいたが、その父が難病で苦しんでいた。ある者が、「鶴の生血を

与えれば、難病が治癒するであろう」と語った。

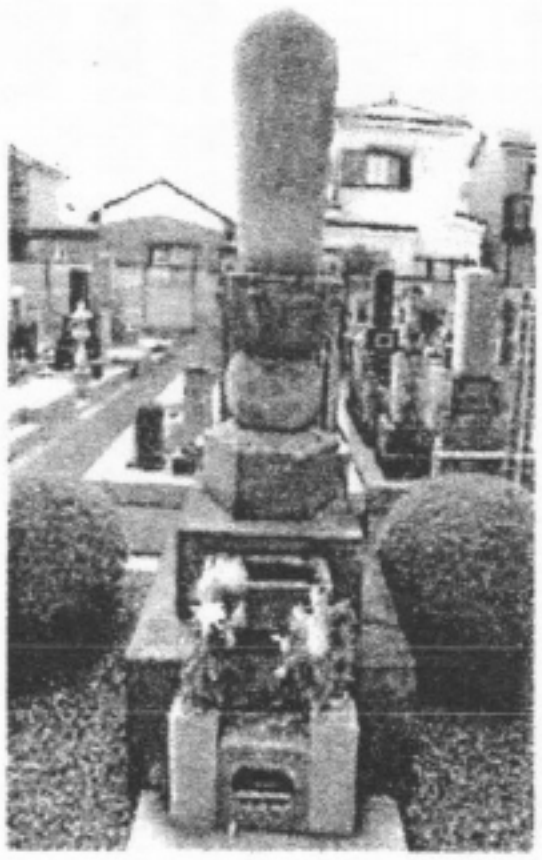
そこで源次兵衛は鶴を捕獲して病苦の父に生血を与え、これが発覚して舘林藩に追われの身となり、転々としたあと大光寺に駆け込み命乞いを願った。

呑龍は、父を思う若者の孝心にうたれ、本堂裏の岩窟内に匿った。これが舘林藩に知れ、幕府に訴えでた。幕府からも出頭命令が出され、厳しい達し書を受けた呑龍は、「一度救うと誓約した以上、窮鳥を見すてる訳にはいかない」として、深夜源次兵衛を剃髪させて弟子となして、大光寺を抜け出し浅間山麓小諸の草庵に仮住した。この時の生活は三度の食事にも事欠く状態で、寒風身に凍みる時でも筵を纏い忍ぶ日々であった。（この草庵は後には、呑龍の徳をしたう村人により、念仏道場となり仏光寺として創建された）

○階位・身分の剥奪　幕府は無断で離山した呑龍に対し、「階位・住職の身分剥奪」し、同時に大光寺の３００石の寺領を没収。この為１０００名におよぶ一山の僧徒・衆生は山から四散、寺は「死の伽藍」と化した。

○観智国師の死と秀忠のご赦免　小諸に隠れ住んでから４年の歳月が流れた元和６年１６２１年呑龍の師、観智国師が病で倒れ臨終を迎えた。これに対し秀忠は土井利勝を使者として見舞いに派遣し最後の希望を訪ねた。この時観智国師は、「何も無いが、願わくば、呑龍の赦免をお願いしたい」と言い残し寂した。この遺言で翌７年足掛け５年目に御赦免となり、大光院の復興に努めた。次いで翌年七月秀忠は呑龍を江戸城に招き、多年に亘る衆人の教化や幼児の養育、さらには小諸蟄居の労苦を親しく慰め、常紫衣上申の旨を達した。

○天皇より紫衣賜りと示寂　こうして２ヵ月後、宮中に参内。後水尾天皇より紫衣を賜ったが、１６２３年８月、「吾れ命終わるの後は、荼毘にせず、東面して堂の西霊廟の傍らに埋葬せよ」と遺言を残し、七日間の念仏会を執行した後、示寂した。　時に呑龍６８歳の夏であった。



○この大光寺呑龍の印塔墓石と全く同じ大きさの供養墓石が林西寺（※市文化財指定）にも建てられています。

●林西寺朱印状

次ページの説明画像参照。

徳川15代将軍のなかで、朱印状が出されていないのは、６代と７代（在任期間が短期）及び15代（幕末争乱期）の三代。

（参考）越谷四丁野迎摂院・浦和玉蔵院には、12通有り。

越谷野島浄山寺にも11通。

※迎摂院の朱印状も市指定文化財。

●水戸天狗党の騒動を記した「白龍山日記録」など宝暦年間よりの日記録も残っております

●越谷・六阿弥陀めぐり

江戸時代、江戸の町で盛んに行われていたのが、「六阿弥陀めぐり」である。浄土宗阿弥陀仏如来像が安置されている六ケ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰。当地越谷にも、江戸の六阿弥陀めぐりをまねて、天明8年(1788年) 船渡村の受道によって、「新六阿弥陀」めぐりが行われた。

① 越ケ谷の天嶽寺　② 増林の林泉寺　③ 登戸の報土院
④ 平方の林西寺　⑤ 大泊の安国寺　⑥ 大松の清浄院

● 平方（彦太）の渡し

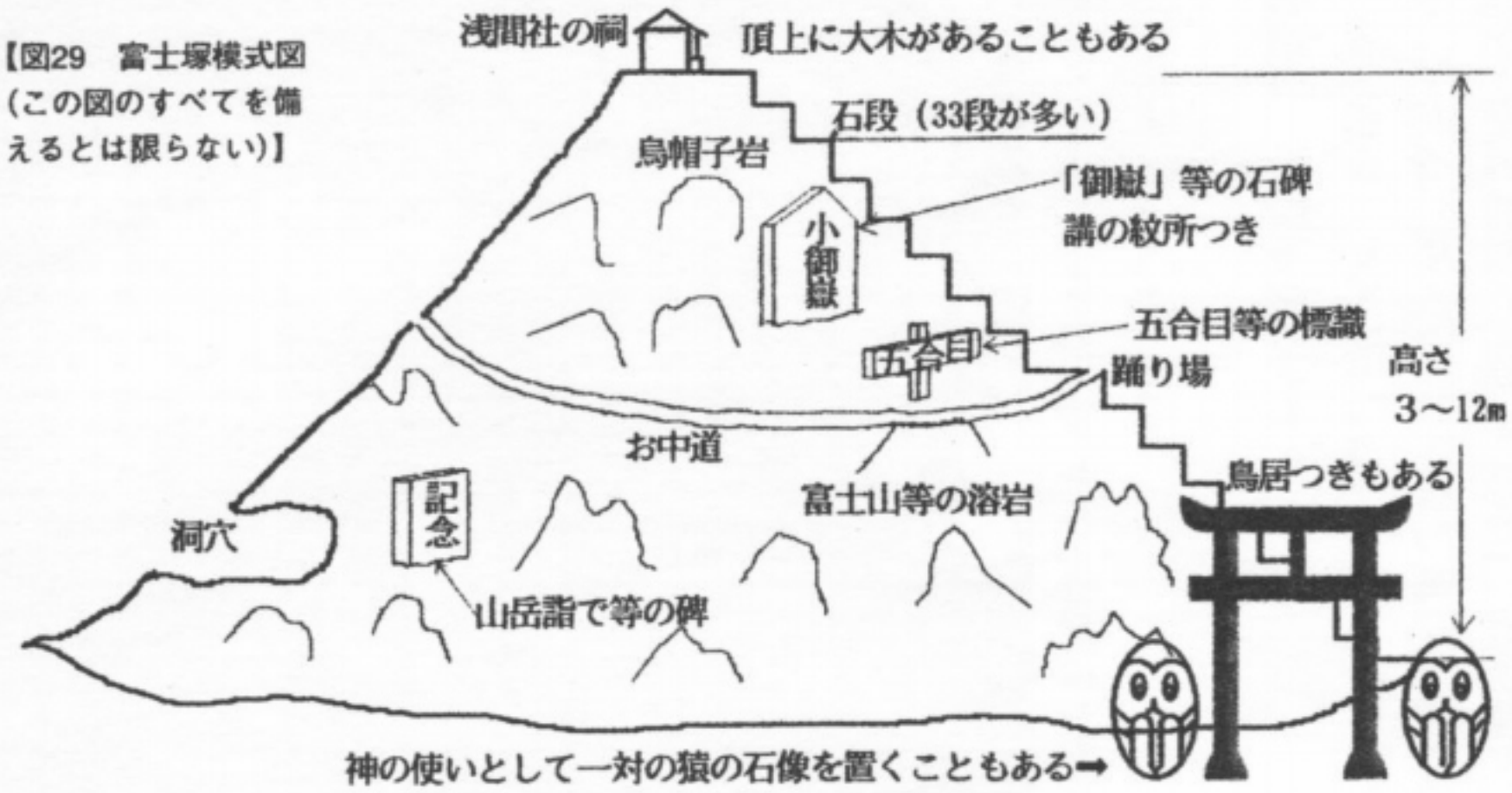
往時、越谷には18ケ所の渡し場がありました。（添付資料参照）古利根川では上流二番目の渡しが平方(彦太) の渡しです。対岸は春日部市銚子口。かの地は古くから古利根川と庄内古川に囲まれた地域で千葉県銚子市と同じく「銚子」に似た地形から名づけられました。当地の獅子舞は越谷下間久里より元禄10年伝来。渡しの機能が生かされていると思います。

● 平方浅間神社

越谷には江戸幕府が編纂した地誌「新編武蔵風土記稿」に、当時、大沢・越ケ谷・大竹・東方・増林及び平方に浅間社（仙元社）が祀られたと記載。浅間社が、勧請されるようになったのは、富士信仰が広まった平安時代からと伝えられているが、武蔵国足立郡・埼玉郡地域に祀られたのは、南北朝期～戦国期1331年～1890年にかけてのこと。

特に江戸享保18年1731年富士信仰の行者伊藤食行が富士山頂烏帽子岩で行った富士禅定（生きながら土中に埋められること）が、世人に強烈な感銘をあたえ、同時に熱狂的な富士信仰信者により富士講が組織され、各地に富士塚が築かれ多くの浅間社が勧請された。当地浅間社の多くは、勧請の紀年などは伝えられていない。

③ 補記　報土院は現代の六寺
江戸時は松伏町赤岩　源光寺



【図29　富士塚模式図（この図のすべてを備えるとは限らない）】

当社の鳥居の傍らには、文化10年（1813）の鳥居供養塔が、また1839年の石坂供養塔、1854年の御手洗石、1843年の小御岳石尊大権現云々」と刻まれた自然石等が置かれている。

当社は、平方の鎮守とされ、平方のほぼ中央に位置し、社殿は小さな丘の上に、建立されている。この小丘は、かつて古墳ではないかと県が調査されたが、何も出土せず、古墳でないことが確認された。祭神は木花開耶姫命。

社殿は大正6年火災にて全焼したが、大正8年に再建。

● 大泊観音堂（慈眼寺）

裏側は会野川流路跡で古利根川乱流時の一河道跡でこの一帯は、会野川により形成された砂丘を思わせる発達した自然堤防上にあったとの事である。

正面の観音開き板扉の古びた堂舎が観音堂で、右手集会所がもと慈眼寺と称した浄土宗の寺院跡。慈眼寺の開山僧は、1392年の没年を伝える古刹の由。

観音堂は大房薬師堂と同じく左甚五郎建造の伝説を残しているが、本尊には、馬頭観世音が祀られており、午の歳には馬を引いた近在の馬主達が参詣に詰め掛けて賑わったといわれています。更に堂内には、明治期のものと見られる出店や参詣人でうずまった観音堂縁日の賑わいを画いた絵画が掲げられている。

なお前述伝説とは、甚五郎が、元、一面の杉林であった当所を訪れ、石に腰を下ろして休んでいたが、夕暮れになるとともに杉の木を数十本切り倒した。切り倒された杉の木は自然に動き出し一夜のうちに観音堂が建てられた。翌日思いがけない堂舎の出現に驚いた村人たちが大勢集まってきたが、この堂には朱が塗られてなかったので、

朱をいれた甕が何所かにある筈だと捜しまわした。ところが堂の傍の楓の木に「朝日さす　夕日耀く　花の下」の歌が記されており、その場所を掘ったところ、朱を入れた甕がでてきたとの話です。

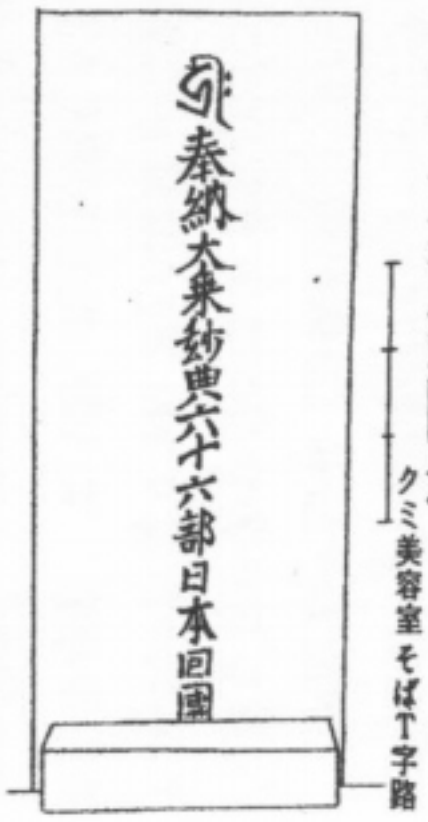
●「観音堂の縁日風景」絵馬・・・市指定文化財）
明治から大正にかけての縁日風景の絵馬です。

● 会の川　金塚（宝船）伝説

平方と大泊の境に、かっては「会野川」が流れていた。その名残が大泊側の人々から「せどっぽり」（漢字にすると「瀬戸堀」か）と呼ばれた堀である。念仏橋通りと堀との交差する地点には比較的長い石橋が戦後まで架かっていた。すぐ傍に「石橋」と呼ばれた屋号の家（大泊側）が道路西側に今でもある。その平方側の山谷には、地元では「金塚」と呼ばれた石塔が今でも建っている。その金塚についての言い伝えがある。

江戸時代、戦を行っていた侍達が乗っている船がこの会の川を通ったが、嵐の為に難破し、乗っていた侍達は亡くなった。そこで侍達を葬り、供養をする為に石塔を建立。これが金塚の石塔である。石塔の名の由来は、沈没した船には金銀財宝があったとの言い伝えがあり、このように呼ばれたとの事である。

67平方・六十六部廻国塔



● 千住の名倉堂

「千住の名倉」で名の通った、接骨院名倉堂もこの大泊の住人であったが、この名倉家第11代弥次兵衛が元禄期に退転し千住に居を移した。この名倉家の祖は、阪東八平氏のうち秩父氏の出身、後に大里郡畠山に居を移して畠山氏を称したが、さらに秩父郡吉田町奈倉に本拠を構えて名倉姓を称し、その後、岩槻から当地へと移って来た。ちなみに当時接骨に必要とされた薬法のうち、黒膏といわれた貼り薬は、弥次兵衛が修得したものです。

● 一本松

（北西側（大枝側）より南東方向（大泊側）を望む）

大泊村と大枝村の境にひときわ天に高くそびえ、直径二メートルを超す太い松があった。すぐそばの大泊村の安国寺所有の松で、草加方面から日光海道（現代では街道）を下って来ると、間久里あたりからその「一本松」がよく見られ、旅人の目印になった。

途中から右に折れれば、曲らずに真っ直ぐに行けば大枝村に入る

のである。　※古奥州街道の項、ご参照。

また安国寺では、この松を「杖振りの松」と呼んだ。言い伝えによると、三代将軍家光がここに訪れ、松の木下で杖を振って、この安国寺に寺領を示し与えたとされます。

● 安国寺

大泊の浄土宗安国寺は、大龍山東光院と号し、古くは熊谷蓮生法師（熊谷直実）の修行草庵であったと伝える。その後の康安元年（1361年）紀伊国熊野大宿泊村安国寺の住僧であった誠誉専故が東国を行脚、下総新方庄（寛永18年より武蔵の国）の利根川通りの会の川沿いの渡河地点大泊が蓮生坊の故跡と知り、同年会の川の自然堤防上に、寺院を建立、故国と同地名のもとに、当寺を安国寺と称したという。もっとも足利尊氏が暦応年間（1338年～42年）六十六州各国一寺院に利生塔を建立、安国寺と称したが、大泊安国寺がその一寺かどうかは定かでない。

この安国寺の本尊は阿弥陀仏の立像だが、これは熊谷蓮生法師の守仏と伝わっている。天正19年、安国寺には高四石の寺領が付け置かれたが、手続きがとられないままで、家康と秀忠の寺領朱印状は交付されなかった。その後、慶安元年（1648）三代家光の寺領朱印状が交付された。

●熊谷直実について

鎌倉初期の武士。武蔵熊谷の人。初め平知盛に仕え、のち源頼朝に降り、平家追討に功。久下直光と（頼朝の面前で）地を争い、（口下手の為に）敗れて京に走り仏門に入って法然に師事、蓮生坊と称す。一の谷の戦に平敦盛を討ったことは平家物語で名高く、謡曲・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎に作られる。（1141～1208年）

●円空仏（市指定の文化財）

円空は、越谷市には1682年51歳・1689年58歳の時2度立寄りこの時宿泊したとされる。この安国寺の他・弘福院・西福院の三寺院に円空仏が現存。

当寺の円空仏像は、「主仏は、珍しい揚柳観音の坐像（高さ70.7cm）脇仏は童子（同52.2cm）と善女の立像（同51.0cm）

●観智国師の書状（市指定文化財）

呑龍上人の説明資料に登場されたお方。当時（天正年間）浄土宗の支配等は、大本山京都知恩院と同格の扱いを受け、幕府との折衝に当ったのが、芝増上寺で、その住職は家康の信任ことに厚かった増上寺第12世普光観智国師であった。この国師の書状が安国寺に現存する。全国的にも現在確認される観智国師の書状は数少ないといわれる。

○僧の尊称について

大師・・朝廷が特に偉大であった高徳の僧に送られた諡号。
弘法・伝教・元三（金さな大師）・円光（法然）など

国師・・大師と同様朝廷から国家の師表たる高僧に送られた
称号（諡号）　夢窓国師・沢庵・崇伝など

上人・聖人・・学徳を備えた僧に対する称号。宗派ごとに
ルールがあるようです。浄土真宗親鸞聖人・浄土宗法然上
人・日蓮宗日蓮大聖人

●本尊阿弥陀仏立像（市指定文化財）

本尊の阿弥陀如来は恵心僧都の作であり、蓮生坊が法然上人より
譲られたもので、京都から笈に負って当地に安置されたものと伝え
られています。

●綱吉朱印状・※当寺には併せて九枚の朱印状が保存。

安国寺には、天正19年、高4石の寺領が付け置かれたが、前述
の通り手続きが取られないままで、初代家康・二代秀忠の朱印状は
交付されなかったが、三代家光以降歴代の将軍朱印状が9枚交付さ
れた。

徳川綱吉の寺領朱印状

武蔵国埼玉郡大泊村安国寺領
寺中境内四石事任慶安元年
九月十七日先判之旨寄附之訖
全可収納并同所竹木諸役等
免除如有来永不可有相違
者也
貞享二年六月十一日

●山岡鉄舟の画賛

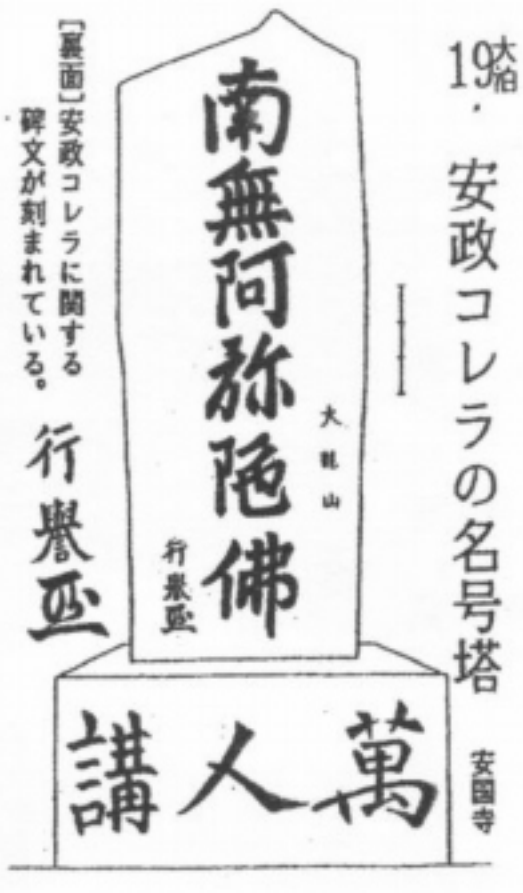
幕末～明治にかけての剣道・書道（徳川三舟の一人）の達人の画
賛や書類が残されている。
鉄舟は芝増上寺の大檀那であったので、安国寺とも知り合いであ
ったと思われます。

山岡鉄舟画賛

●宝暦年間、松浦肥前守の家臣石川義俊が、当寺に納めたと伝える紀貫之の作、柿本人麻呂木造一躯もある。

●安政コレラの名号塔（安政6年10月　行誉宏善奉納）

※行誉宏善上人は、徳望高い当時の安国寺中興第二十五世住僧で、各地多くの人々が遺徳を偲び、境内に静坐した彫像を祀ったお墓が建立されている。（巨大な墓塔には総数七百六十名の名が刻まれている）。



19大泊・安政コレラの名号塔

〔裏面〕安政コレラに関する碑文が刻まれている。行誉

安政五年（1858）に二度目の日本上陸を果たしたのであったが、人々はこの疫病が激しい吐瀉（としゃ）すなわち嘔吐（おうと）と下痢とを伴い、即日あるいは僅か二、三日でころりと死に至る場合が多々あることから、これをコロリと呼んで怖れていた。対馬の人々がこの疫病を「見急」と呼んだのも、朝に元気な姿を見せていた人が夕には死んでいるという程の劇症を怖れてのことであった。

この疫病・安政コロリに羅病し死亡した者は江戸市中だけで三万人とも二十六万人とも言われている。統計がないため正確な死亡率は不明だが全国に蔓延し多くの人々が病死したが、この時当地域の人々は安国寺に参籠し、昼夜をわかたず弥陀仏の名を奉唱し病魔の退散を祈った。この為当地域には病魔が入り込まなかったが、今更仏の功徳に感じ入り、樋を建立した旨が記されています。またこの時、越ケ谷町では久伊豆神社の神輿を町内に設けられた仮小屋に安置し悪魔退散の祈願を行なったところ、それからはこの地域から一人もコレラ患者がでなかったという言い伝えもあるそうです。

尚、一説ですが、この時のコレラで第13代将軍家定も亡くなったとも言われております。

文政五年（1823）に日本に初上陸し西国を中心に流行したコレラ＝ラテン語名「コレラ・モルブス」は、その三十六年後の

●寺社領の多い越谷

大相模大聖寺60石・平方林西寺25石（別途学問料25石あり）・大泊安国寺4石・越ケ谷天嶽寺15石・大松清浄院12石・大相模浄音寺10石・瓦曽根照蓮院5石・四町野迎摂院5石・大房浄光寺5石・野島浄山寺3石などがある。

越谷には御朱印寺院が極めて多いのが一つの特徴。おそらく越谷地域は古くから小田原北条氏と反北条方の岩槻太田氏との狭間にあって、支配状態が不安定であったため、在地土豪層が領主として成長出来ないまま、政治的中立の立場を取ることが出来た寺院勢力が各所に割拠し、その状態のまま家康の関東入国を迎えたことが、御朱印寺が多くなったのが一因と考えらます。

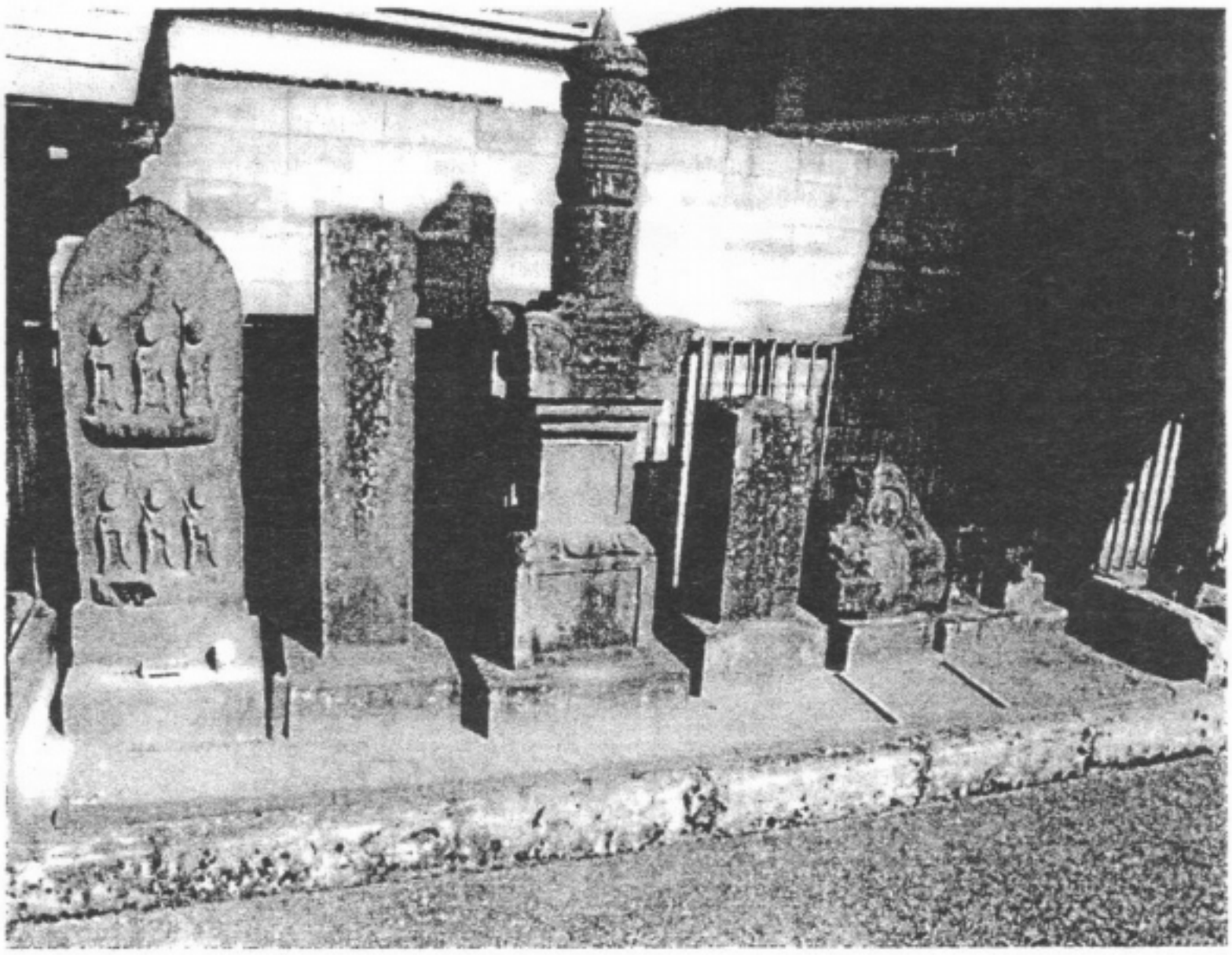
旧大枝村歓喜院（かんぎいん）の明治の水準点「高低測量几号（きごう）」

春日部市大枝の歓喜院の墓地内に貴重な明治の水準点「高低測量几号」が、本来の場所からは移動はしているものの、現在まで無事に残っていることが判明した。几号が刻まれている石塔とブロック塀との隙間がわずか２０センチメートル程しかなく、しかも、刻まれた几号は地面すれすれの所で、探し出すには困難を生じるのに、よくぞ見つけ出したものである。私が平成１３年に石仏調査を細部にわたって行ったにもかかわらず見逃したものである。この水準点を初めて発見した方に大いに敬意を表したい。冊子「旧大枝村の石仏」（加藤幸一著）の図版でいうと、図版１４の「宝篋（ほうきょう）印塔」である。

図版１４を含む図版１２「一石六地蔵菩薩像」から図版１８「稲荷文字塔」までは、現在、墓地内に西方を向いて一列に並んでいるが、もともとは歓喜院の境内の外の日光街道（日光道中）の西側沿いの路傍に東方を向いて同様に一列に並んでいたものである。昭和２９年頃に日光街道の道路の拡張にともない移転したものである。移転前とは１８０度向きが変わっている。

明治の水準点

このうち、中程にある図版１４「宝篋印塔」の台石の裏側に明治の水準点である「不」の字のような記号「高低測量几号」が刻まれているのである（右上の写真）。



向かって左から３番目の石塔「宝篋印塔」の台石の裏側に明治の水準点の記号が刻まれている。本来は向かって左から２番目の普門品供養塔に設置されるべきである。大枝にある普門品供養塔に刻まれた明治の水準点を日光街道の路傍から墓地内への移転の時に、この普門品供養塔の明治の水準点が誤ってその隣の宝篋印塔に設置されたようである。

インターネットの「高低測量・几号水準点 」（uenishi.on.coocan.jp/j584kigousuijun.html）によると、内務省地理局雑報掲載の中で、大枝村の几号水準点が下記のように掲載されていることから判明した。

「015　大枝村字屋敷前普門品供養塔　6.6431」（「6.6431」は、標高を表し、単位はメートル）

なお、出典は「内務省地理局雑報第十四号六月」（復刻版　内務省地理局編纂物刊行会／編『内務省地理局編纂善本叢書』14、ゆまに書房、1985、539-541 頁）。

越谷市内の渡し場

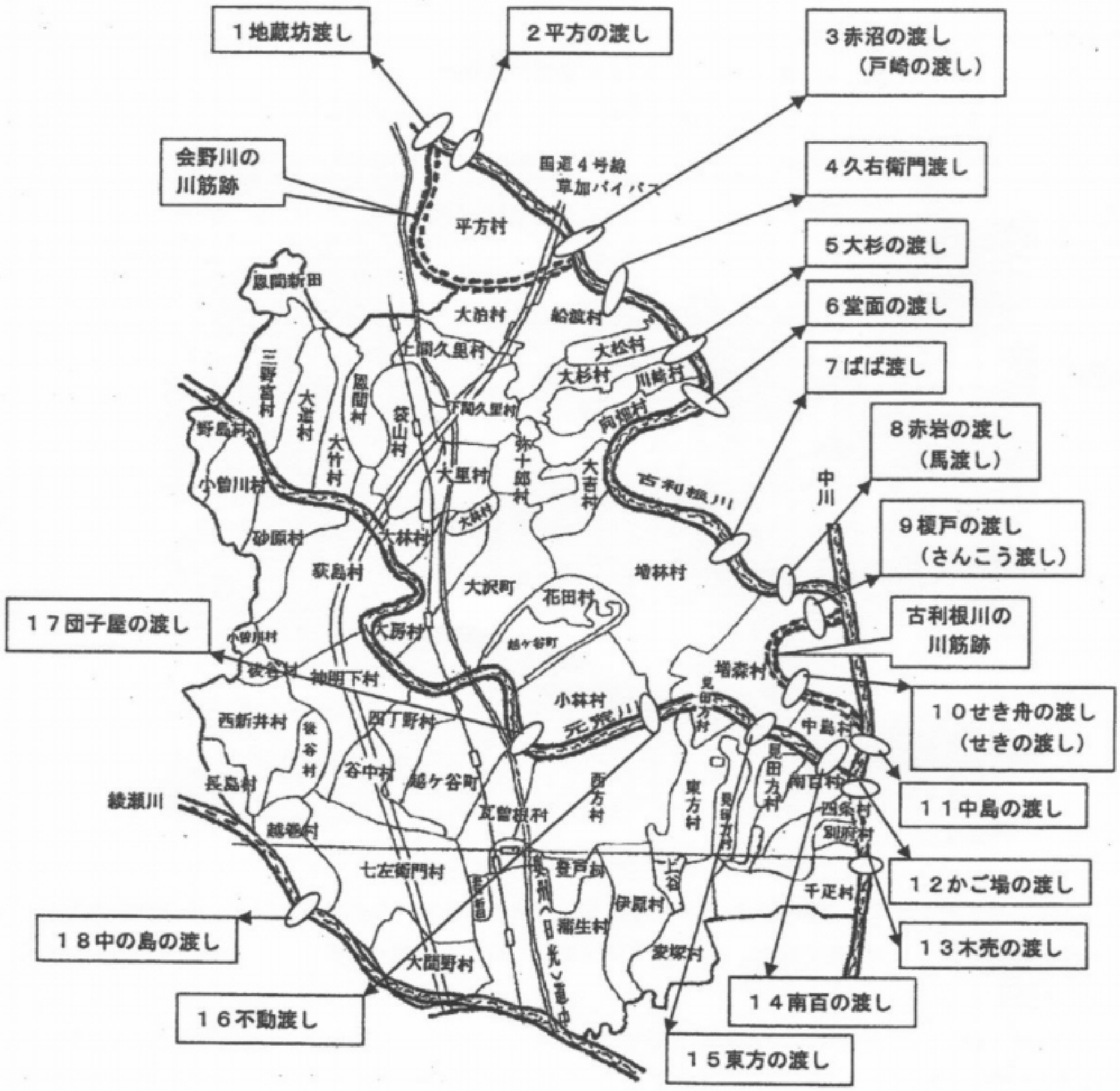
現在、川を渡るには全て橋が架けられているが、昔は主要な往還道（日光街道の元荒川を渡る大沢板橋など）以外は橋が無かったので、ほとんどが舟を利用した。いわゆる渡し舟である。その発着場を渡し場という。

私有舟でない「公用」の渡しは、村の入用費や自費などで舟を備え、「渡し守（もり）」（渡し番・川番）が管理した。今でも「渡し守」を勤めたという家が残っている。

渡し守は渡舟運賃を徴収したが、村人は運賃の代りに米・麦などを毎年納めて利用したともいう。

江戸・明治・大正・昭和と、それぞれの渡し場は時代とともに消えたり、橋が架けられたりして、今では名前が一部残っている所もある。

ここに渡し賃を徴収して利用した公用の渡し場を、地図上に表してみた。



発着場	1	備後～銚子口	7	増林～上赤沼	13	千疋～木売
	2	平方～銚子口	8	増森～下赤沼	14	南百～中島
	3	戸崎～赤沼	9	増森～榎戸	15	東方～増森
	4	船渡～大川戸	10	増森～須賀	16	西方～小林
	5	大杉～大川戸	11	中島～吉川	17	瓦曽根～小林
	6	向畑～松伏	12	南百～吉川	18	越巻～中の島

参考資料

ＮＰＯ法人　越谷市郷土研究会資料	
越谷ふるさと散歩・越谷の歴史物語	越谷市市史編纂室
越谷風土記・わたしたちの郷土こしがや	越谷市教育委員会
春日部市文化財マップ・春日部市の神社	春日部市教育委員会
郷土越谷散策マップ・水郷と歴史のまち	越谷市・観光協会
こしがやの文化財	越谷市教育委員会
神社ふしぎ探検	外山春彦著
埼玉の祭り・行事	埼玉県教育委員会